



誰もが議論に参加できる 言語環境

第33回 坊農 真弓 (国立情報学研究所, 総合研究大学院大学)

著者紹介 ▶ 2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。ATRメディア情報科学研究所研究員、京都大学大学院情報科学研究科研究員、日本学術振興会特別研究員 (PD)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 CLIC 客員ポスドク研究員、テキサス大学オースティン校文化人類学部客員研究員を経て、2009年より国立情報学研究所・総合研究大学院大学助教。2014年より同准教授。2016年マックスプランク心理言語学研究所客員研究員。多人数インタラクション研究および手話研究に従事。社会言語科学会、日本認知科学会、日本手話学会、人工知能学会、情報処理学会各会員。博士 (学術)。

筆者は今、ドイツにほど近いオランダ南部のナイメーヘンにあるマックスプランク心理言語学研究所 (以下、MPI) で研究活動をしています。昨年度から公募が開始された科研費の国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化) に採択され、今年の4月から来年の3月までの一年間、手話のコミュニケーションについて、こちらの研究者達と共同研究を進めています。

こちらに来てまず驚いたことが、手話プロジェクトを進めるうえでの言語環境です。会議やミーティングにはほとんど手話通訳が付いています。MPIには、プロジェクトの技術補佐員や博士後期課程院生兼リサーチアシスタントとして雇用された、手話を母語とするろう者がたくさんいます。また、聴こえる研究者も手話が流暢な人ばかりです。しかし、ろう者と聴者が対等な立場で学術的な議論をするには、経験豊かな手話通訳者の力が不可欠になります。ここで用いられる手話は「国際手話」です。国際手話は英語では「International Sign」といいます。国際手話は主に、ヨーロッパで各国のろう者や手話通訳者が集まる会議で用いられます。「International Sign」に「Language」の語がないことからわかるように、国際手話は国際補助語の一つで、言語とはみなされていません。言語とみなされない理由の一つに、国際手話には母語話者が存在しないことがあげられます。国際手話は異なる手話言語を元にした一種のピ

ジン言語なのです。異なる言語をもつ国が陸続きのヨーロッパでは早くからこの国際手話が用いられるようになり、世界中のろう者が集まるスポーツの祭典「デフリンピック」や世界ろう者会議には国際手話通訳が付きます。筆者はオランダに来る前、日本国際手話通訳・ガイド協会が提供するビデオチャットによる国際手話ビギナーコースを受講してきました。

先日実施した10人程度のデータセッションでは、アムステルダムから来るはずだった手話通訳者の都合が急遽悪くなり、代理の手話通訳者の方をデン・ハーグから呼びました。急な依頼だったことや、ユトレヒトで線路工事があったことなどから、その代理の手話通訳の方は40分遅刻されました。しかし、教授も准教授も院生もみな、その間議論を始めることなく、手話通訳者を待ち続けました。黙って待つのではなく、ろう者も聴者も手話で世間話をしながら、この40分間を過ごしました。

筆者はまだ国際手話があまり話せません。筆者が使えるのは英語と日本手話です。このデータセッションにはろう者の韓国人留学生 (博士後期課程) がおり、この40分間、筆者の日本手話と国際手話の混じった表現を読み取ってください。ほぼ向こうのサポートで何とか世間話に加わることができました (韓国には日本手話を持ち込まれた時期があり、韓国手話と日本手話は似ている部分があります)。このほかにも、ろ

うのオランダ人とも手話で話しましたが、ほとんど向こうの表現豊かさでカバーしていただき、筆者から質問や深い問いかけはできませんでした。日本で同じ状況が発生したら、聞こえる研究者が音声発話で徐々に議論を始めてしまったかもしれません。しかしこれでは、手話を生活言語とするろう者を、議論から置き去りにしてしまいます。手話通訳者を待つという判断をするのが、ここでは当然のことなのです。

日本ではろう者が聴者と対等に国際的な研究活動をする風景はあまり見られません。見られない理由として、(1) 大学や研究機関で高等教育を受ける機会がろう者に与えられてこなかったこと、(2) 経験豊富な手話通訳者を会議に呼ぶ窓口ややり方が共有されていないこと、(3) 国内のみで通じる手話だけで議論をしていることなどがあげられます。

いま、筆者の研究室には手話を生活言語とするろうの院生がいます。彼と筆者の一对一のやり取りは日本手話で進めています。研究室ミーティングの事務連絡部分は研究室メンバが持ち回りでPC通訳しています。より高度な内容が議論されるプロジェクトミーティングや講義には経験豊富な手話通訳者を2名呼び、20分交替で手話通訳をしていただいています。研究室のメンバが持ち回りで実施するPC通訳は、「どのような日本語を話せば、要約筆記しやすいか」を院生やスタッフが理解するのに役立

ちます。また、経験豊富な手話通訳者による通訳は、学術的な内容を共有するのに欠かせません。こういった研究室運営を通じ、先日このろうの院生が情報処理学会の研究会発表で、学生奨励賞をいただきました。今回の受賞は、筆者達の研究室運営のやり方が間違っていなかったと実感できたうれしい出来事でした。

では、どうすれば経験豊富な手話通訳者を確保し、ろう者が大学や研究機関で高等教育を受ける環境が整備できるのでしょうか。筆者の場合は、信頼できる手話通訳の方を通じ、次々と新たな手話通訳者となつていきました。現在筆者の研究室は10名前後のフリーランスの手話通訳者の方々に個別に通訳を依頼しています。東京には手話通訳派遣を実施している民間団体もありますが、詳しい情報はインターネットにはあまり出ていません。また、講演などにはPC通訳が必要になります。PC通訳はいくつかの民間団体が実施しており、見積もりを依頼して利用を検討することも可能です。こういった情報保障についての情報を統一的に扱う組織があればなおよいと常々思っていますが、残念ながら現在そういった団体はありません。

では、オランダの場合はどうでしょうか。オランダはアムステルダムなどの中心都市に経験豊富な手話通訳者が集中しているそうです。MPIがあるナイメーヘンへはアムステルダムから電車で2時間程度かかります。時間はかかりますが、経験豊富な手話通訳者の確保は学術研究を円滑に進めるためには非常に重要なことです。こちらの研究者の方々は、遠方の手話通訳者に移動を強いてしまうため、交通費のみならず1km当たり60セント換算で拘束料金を支払っていると聞きました。日本でも経験豊富な手話通訳者の方々に遠距離移動を依頼することが増えてきました。拘束料金の支払い基準や謝金の基準が徐々に定まれば、経験豊富なフリーランスの手話通訳者の方々もより豊かに仕事ができるようになるのではないのでしょうか。

次に、陸続きの隣国をもたない日本

において日本手話を使って議論することについて触れたいと思います。日本語と同じで日本手話もまた、海外で通じない言語です。手話の場合、アメリカで開催される国際会議はアメリカ手話の通訳が準備されます。一方で、ヨーロッパで開催される国際会議は、学会の費用を用いて国際手話が付けられたり、ヨーロッパの各国の研究者が自分の国の手話通訳者を自分の研究費を使って連れてきて、壇上の横で通訳させたりしています。昨年3月に出席したロンドンで開催された手話コーパスのワークショップでは、5～6名の異なる手話の手話通訳者が壇上に立って同時に自国の手話に通訳をしている場面が見られました。彼らは音声英語を例えばスウェーデン手話やスイス手話にそれぞれ通訳しているのです。日本には、音声英語から日本手話に通訳できる通訳者は片手で数えるほどしかいないと聞いています。音声英語から日本手話に通訳できる通訳者を確保できなかった場合、音声英語から音声日本語に通訳する通訳者を置き、音声日本語から日本手話へ通訳する通訳者を置くという2段階通訳をすることがあります。2段階通訳を利用すると、当然通訳に時間を要し、リアルタイムで質疑応答することが難しくなります。また、2段階通訳される中で発言者の本当の意図が伝わらなくなったりすることもあります。

こういった状況の中、手話言語学の第一線で活躍する日本のろうの研究者は国際手話やアメリカ手話を習得して、国際会議などに参加しています。しかし、まだ、そういった国際的な活動を進めているろう者はそれほど多くありません。オランダに来てみて、ヨーロッパにおける国際手話の力、国を超えてコミュニケーションできる力を見せつけられ、日本国内だけで通じる日本手話で議論しているだけでは、国際的な場面での研究活動は難しいと改めて感じています。

日本では今年の4月、障害者差別解消法が施行されました。ろう者が大学や研究機関で高等教育を受け、議論に参加できる言語環境の早期構築が望まれています。この記事で紹介したような、欧米各国で言語研究を進めるための言

語環境は、「究極の理想形」かもしれませんが。言語に興味をもつ言語学者達がつくり上げた言語環境であるために、マイノリティに対する配慮や社会的な振舞いが整っているのではないかと思います。ここまでの環境を今すぐ日本の研究界全体で構築するのは無理でしょう。しかし、環境を整備していくうえで参考になることは山のようにあります。

前ページに記載した、ろう者が聴者と対等に国際的な研究活動をする風景があまり見られない三つの理由に対し、次のような改善ができるかもしれません。(1) ろう者が大学や研究機関で高等教育を受けられるように、ろう者やその他の障害を抱える学生を受け入れた経験がある大学や研究機関がその体験や解決すべき課題を共有する場所をつくる。(2) 経験豊富な手話通訳者を会議に呼ぶ方法を共有するために、それに適した組織が情報をまとめてネットワークを構築する。(3) 国際的な学術場面から取り残されないために、手話を生活言語とするろう者や手話を研究題材とする研究者は、国際手話やアメリカ手話のスキルを身につける。(1)については、情報処理学会アクセシビリティ研究会第二回研究会において、「大学の障害学生支援センターの取組み」をテーマとしたオーガナイズドセッションを企画しています(2016年12月2～3日、於：国立情報学研究所)。(2)については、これまでいろいろと手話通訳コーディネートの経験を重ねてきた筆者やその周辺の研究者らが、いつかすべき仕事かもしれません。(3)については、すぐに変えていくことは難しいかもしれませんが、海外から手話研究者を招くなどして、日本の研究環境に刺激を与えていく地道な活動が必要かもしれません。

どれも人工知能の研究では改善できない課題ばかりです。しかし、言語やコミュニケーションの問題は人工知能や情報処理の研究が間接的にも支援できることがあるのではないかと思います。オランダで筆者が体験した誰もが議論に参加できる言語環境は、自身の今後の研究活動や言語使用に大きな影響を与えそうです。